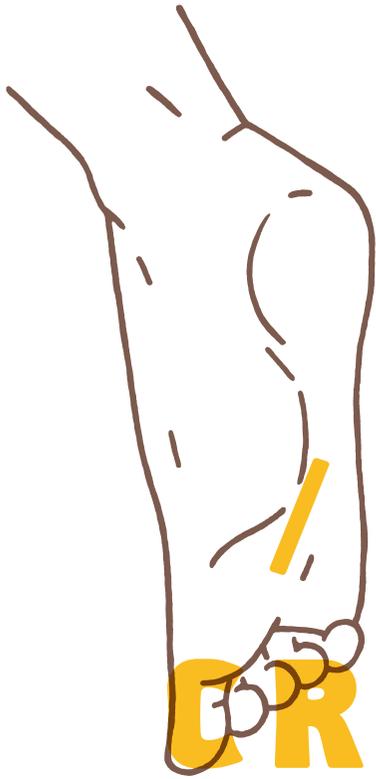


リタイアのない人生のカタログ



LIFE
/ IS \
CREATIVE



ライフ
/ イズ
クリエイティブ

誰かのために。スキルを活かして。
高齢者が活躍する未来に、
ともに向かいたい。

地元のショッピングセンターに行くと、ベンチに腰掛けたまま、長時間ぼーっとしている高齢者の方をよく見かけます。デイケアセンターで行われているお楽しみプログラムは、マンネリ化したものです。超高齢社会だといわれる現代。高齢者人口は増えているにもかかわらず、高齢者がいる環境は明るく充実した環境だとは、決して言えないのではないのでしょうか。

彼らがワクワクしながら参加できるものが、必要です。職場や家庭で培ってきたスキルを活かせる場も、必要です。高齢者を対象に実施、そして他の地域へも展開可能なプログラムを、何かつくれないかと、我々の取り組みはスタートしました。

「男・本気パン教室」や「大人の洋裁教室」。いくつかのチャレンジを通して気付いた、高齢者対象のプログラムにおけるポイントは大きくふたつあります。ひとつは、高齢者が自分自身よりも「誰かのために頑張れる活動」であること。周りの人から、地域から、期待され必要とされることが、彼らの大きな原動力であると感じました。もうひとつは、「そこで身につけたスキルと、地域や社会とをつなぐ場」が不可欠だということです。プログラムを通じて学んだことが、プログラム終了とともに役に立たなくなってしまっただけではもったいない。プログラムを終えた人が、また別の場所で活躍できるようにしたいと思います。誰かのために、高齢者が楽しみながら、未来へ向かう機会をつくりたい。そこに、わたしたちもともに参加し続けたいと思います。

2018年3月

デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)

副センター長 永田宏和

はじめに	P.03
高齢社会の現状と、新しい高齢者のありかた。	P.04
ACTION PLAN 1. スキルを身につける①「男・本気のパン教室」	P.14
ACTION PLAN 2. スキルを身につける②「大人の洋裁教室」	P.28
ACTION PLAN 3. 場とつながる「omusubi」	P.42
ACTION PLAN 4. 地域とつながる「ふれあいオープン喫茶」	P.56
LIFE IS CREATIVE のあゆみ	P.70

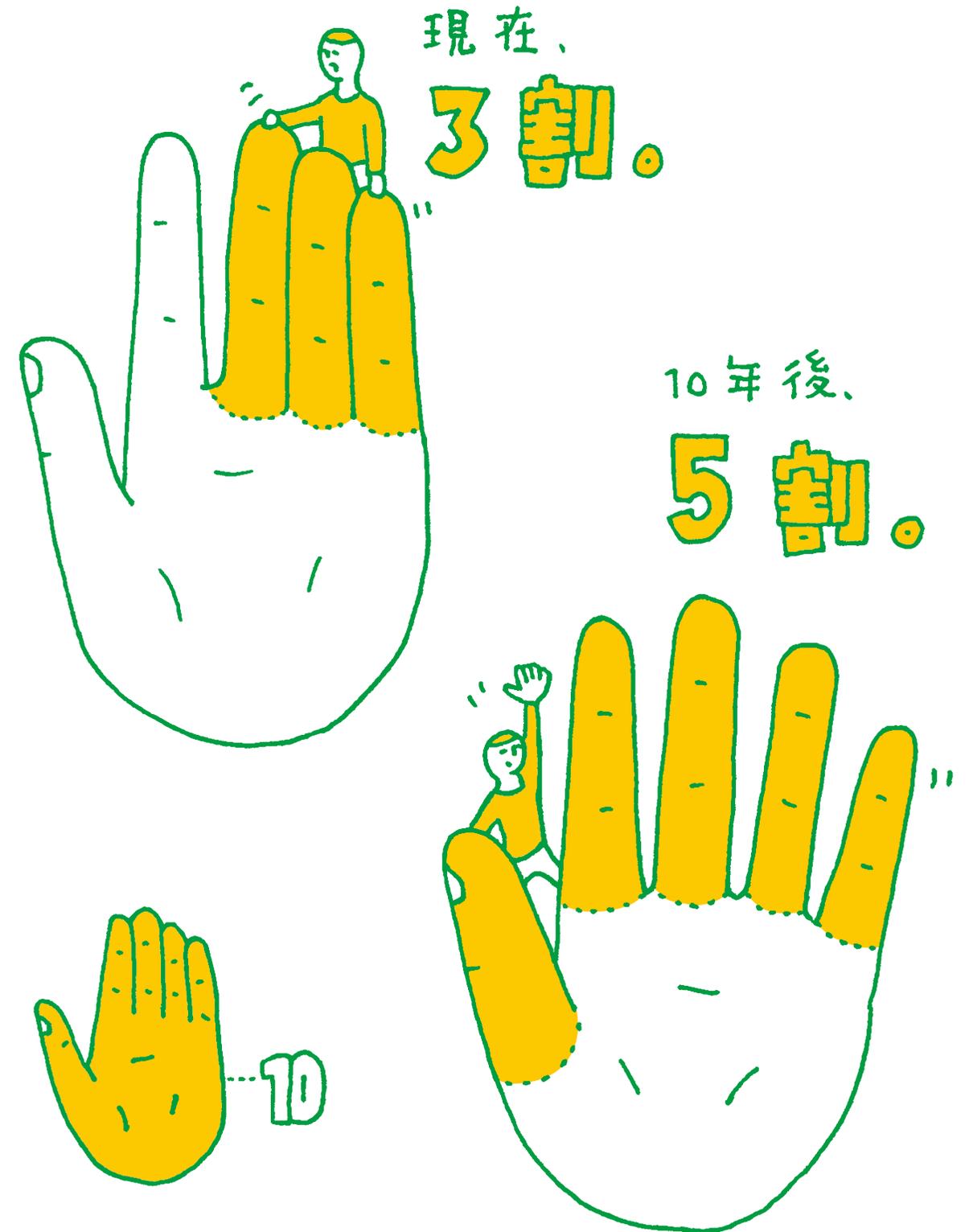
高齢化の進む今、 社会をつくっているのは 若者より高齢者 なのかもしれない。

現在の日本において、「高齢者」と呼ばれる人は、
どれくらいいるか知っていますか？
答えは、約3,460万人*。
人口の3割近くが、65歳以上となっています。

日本の高齢化は2000年をターニングポイントにぐっと進み、
さらに2015年には「団塊世代」が高齢者世代となりました。
2026年には「団塊ジュニア」、つまり団塊のこども世代が50代に。
このときにはもう、人口のじつに半分以上が
50歳を超えている状態です。

このまま高齢化が進んでいけば、日本はどうなるのでしょうか？
高齢者人口が増えていくばかりで、労働人口は減っていく。
年金制度の破綻。介護不安。
高齢社会と聞いて出てくる話題に、
明るいものは見当たりません。

* 2016年現在



年を取るのが
こわい社会は
未来へ向かうのが
こわい社会です。

かつて、長生きすることは、
もっと嬉しいことだったのではないのでしょうか。
還暦から古希、喜寿、傘寿と数えて長寿を祝う。
世界的に長寿の多い日本を誇りに思う。
長生きできること、長生きする人がいることを
もっと喜ぶ社会であったように思います。
しかし今の高齢社会で長生きすることには、
リスクや不安ばかりが目立っているようにも感じられるのです。

高齢者にとって、もっと続けたい人生があるように。
現在高齢者でない人にとっても、
自分たちが向かっていく未来を
もっと楽しみなものとできるように。
これまでとは異なる、新しい高齢社会が必要なのだと
私たちは考えます。

高齢化の事実は
変えられないが、
高齢社会のあり方は
変えることができる。

新しい高齢社会、新しい高齢者のあり方を
つくっていかねばなりません。
高齢者は自分と、身の回りにいる人のために。
今はまだ高齢者でない人は、高齢者と自分が向かう未来のために。
高齢者としての生き方そのものを、みんなで考えたいのです。

たとえば何か、これまでとは違う生きる楽しみをつくること。
家族のなかに閉じてしまわない、人とのつながりをもつこと。
地域や周りの人も一緒にサポートしながら
仕組みをつくりたいと思います。
ひとつの成功モデルができれば、
同じ課題を抱える他の地域や国にも広めていくことが可能になる。
長寿先進国である日本の動きには、
世界も注目していると言われています。



100年生きることが 当たり前になった、 現代の 新しい高齢者。

昔に比べると、少しずつですが、
高齢者のあり方は変わってきていることがわかります。

たとえば1963年時に100歳以上の人口は
たったの150人ほどでしたが、2015年には約63,000人。
半世紀の間に、人は100年生きるのが当たり前の時代となり、
多くの人々が、高齢者として生きることを
強く意識するようになりました。

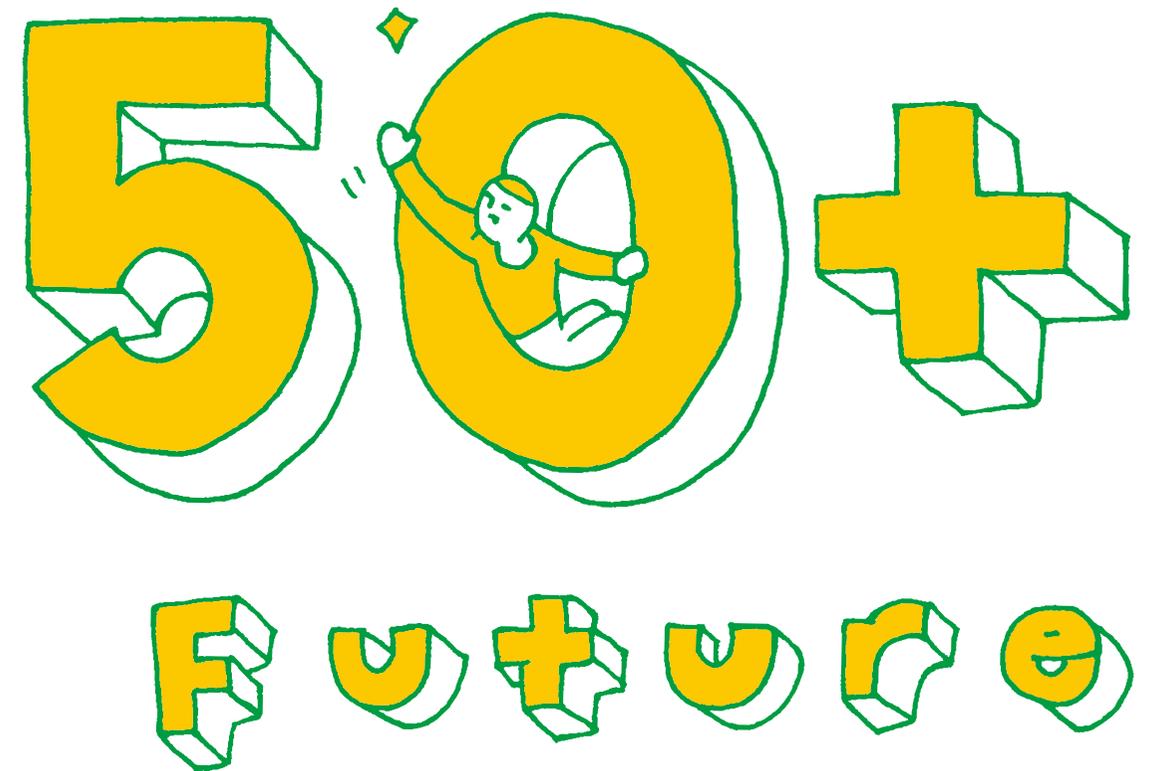
あるいは、最近高齢者の仲間入りをした団塊の世代は、
お見合い結婚の数を恋愛結婚が上回り始めた世代です。
横のつながりがフラットで、
友人関係を大切にする傾向があり、
これまでの高齢者よりも人とのつながりを
強く維持していけるかもしれない。
ポジティブな期待のできる変化がたくさんあります。

かつて弱者と 言われた人こそ、 社会をつくりかえる 力をもっている。

ポジティブな変化は、生活習慣や趣味に関する調査データにも現れています。

代表的なのは、健康や介護に関する考え方の変化です。
かつて高齢者は弱者であり、介護をしてもらうことが普通でした。
しかし現代では、介護を予防するという考え方が増加。
60代以上で何かしらの介護予防を実践している人は、
8割を上回ります。
また、人生を積極的に楽しむ傾向も強い。
9割以上の人が食を楽しむことに前向きで、
退職金の使い方にもっとも多いのは国内旅行と、
とてもアクティブです。

これからの高齢者はただ守られるのではなく、
むしろ介護をする側にもなれるし、
自由に消費活動を楽しんで
経済を回す主体者にもなれるのではないのでしょうか。



自分の人生を つくる活動が 新しい高齢社会を つくっていく。

高齢者のことがわからない。
私たちはまずその認識から出発し、
『LIFE IS CREATIVE 展』という活動を始めました。
2015年には神戸で。2017年には東京で。
そして今回、もっと多くの人と、この本を通じて、
手をとっていきたいと考えています。

これまでは高齢者自身が悩む問題、
あるいは家族の中での問題であった高齢者のこと。
それをもっと地域で、趣味のつながりで、日本全体で、
新しい高齢社会について考えていきましょう。
何かをつくったり、その活動の中でつながりをつくったりすることが、
これからの高齢社会をつくることにつながっているはずです。
そうすれば誰にとっても、年をとることは怖いことでなくなる。
そのときどきの自分の人生を愛し、
その先の未来を主体的につくっていくことができると、
私たちは信じています。

ACTION PLAN ●●●●

ACTION PLAN

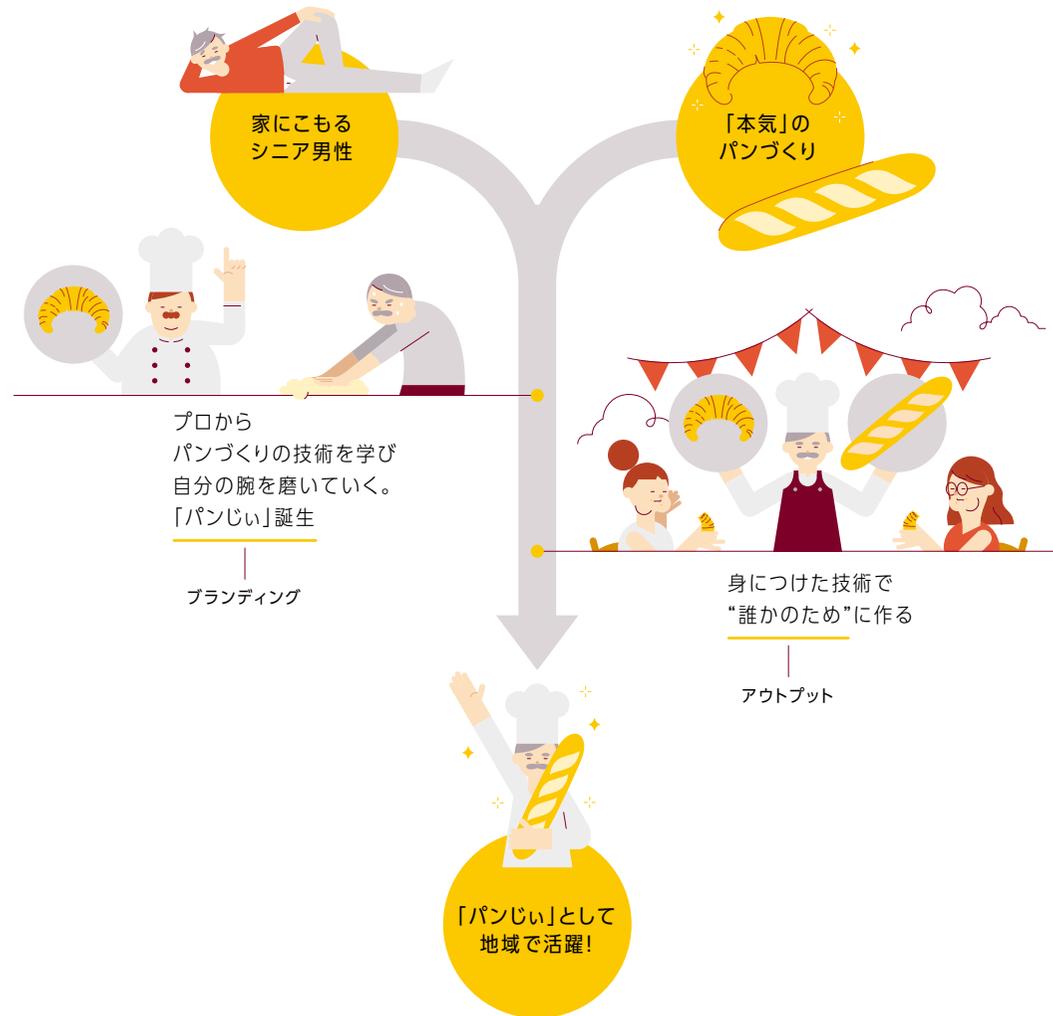
1

「職」のあとに、
つながりをつくるのは
「食」でした。

男・本気のパン教室



「男・本気のパン教室」の仕組み



神戸での実施例

LIFE IS CREATIVE展 ワークショップ「男・本気のパン教室」
 日程： 2015年9月14日、9月16日、10月6日、10月17日
 場所： サ・マーシュ（神戸市中央区山本通3-1-3）
 デザイン・クリエイティブセンター神戸
 講師： 西川功晃（サ・マーシュ/オーナーシェフ）
 参加費：無料
 参加者：6名
 主催： デザイン・クリエイティブセンター神戸

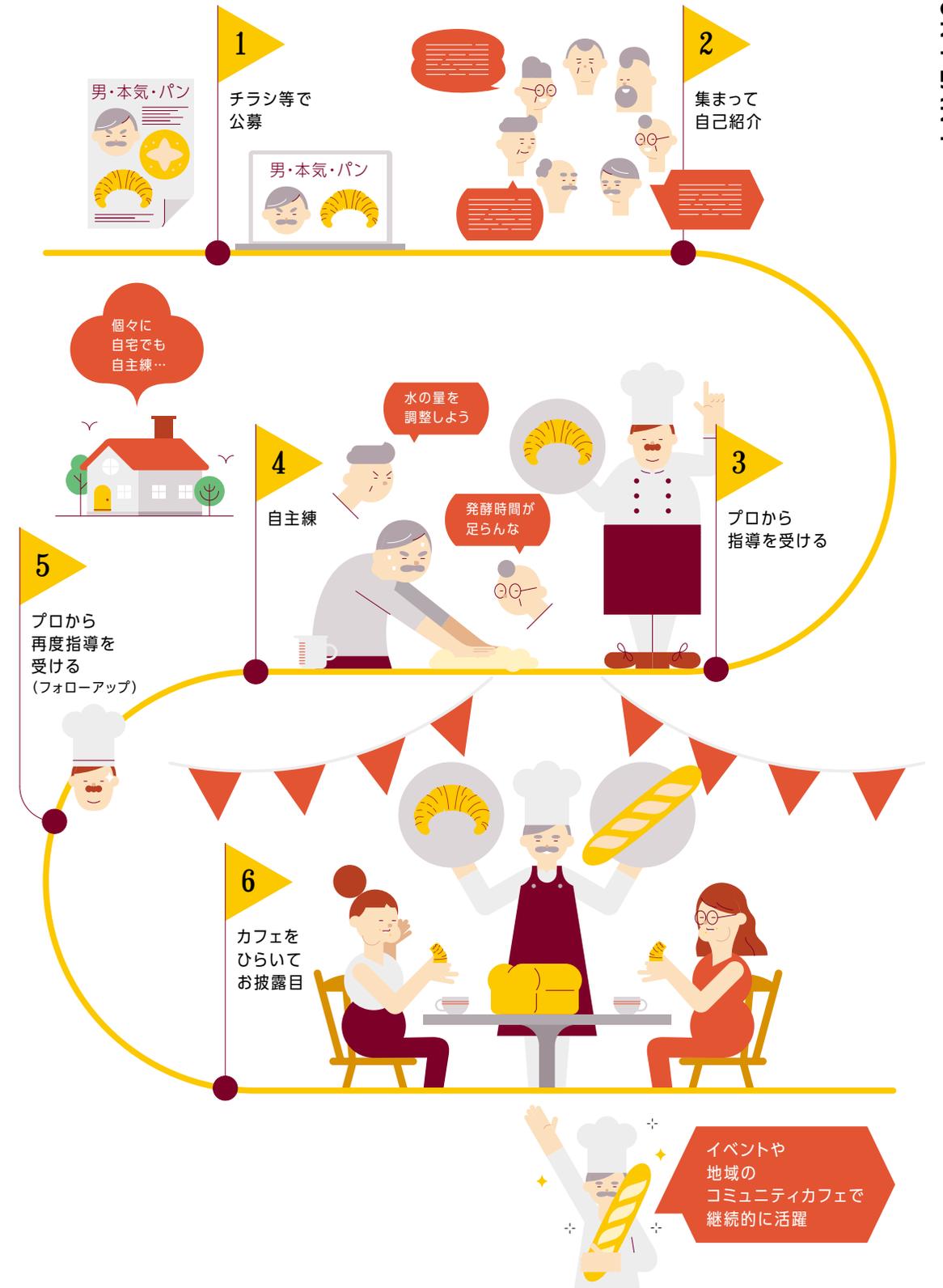
「男・本気のパン教室」
 日程： 2016年11月8日、11月18日、11月25日、12月2日、12月9日
 場所： ケルン本社（神戸市東灘区御影中町1-8-1）、
 カフェやすらぎ（東灘区青木3丁目メイプル番館）
 講師： 壺井豪（ケルン/オーナーシェフ）
 参加費：無料
 参加者：6名
 主催： NPO法人プラス・アーツ、デザイン・クリエイティブセンター神戸
 共催： 日本財団
 協力： 社会福祉法人 神戸市東灘区社会福祉協議会、東灘区役所、
 西青木自治会、青木2丁目自治会



教室が終わっても、パンじいとしての活躍がつづくように。

男性は、人とのつながりが、仕事を介した人とのものに偏りがち。地域の男性同士や同じ趣味を持つ人同士での接点をつくる機会の少ないことが、男性高齢者の課題であったと思います。そこで生まれたのが、「男・本気のパン教室」。「高齢者世代の男性がパン職人に学び、本気でパンをつくったら？」というアイデアを発端として、パンづくりを学ぶことを通して高齢者男性同士のつながりをつくり、パンづくりの技術で地域の人や家族を喜ばせる活動をしよう、というものです。これまで3期にわたる教室を開講してきました。

教室としては、全6回程度。チラシやウェブサイトをつうじて受講生を募集し、抽選で6名が「パンじい」として活動を開始します。初回では趣旨や成果発表までのプロセス説明、自己紹介などを行いました。2回目以降はパン職人の方を講師に指導をしてもらいながら、厨房で実際にパンづくりを行います。講師のいない「自主練」の回もあり、パンじい同士で力を合わせ、教わったことを咀嚼しながら技術を上達させていきました。最終回では、成果発表としてイベントを。パンじいたちがつくったパンをカフェイベントで提供し、様々な人に食べてもらいました。講座が終わっても、パンじいとしての活動は終わらない。反省会をしたり、新メニューへの挑戦をしたりして、それぞれの新たなパンづくりの楽しみを見つけています。



実施のポイント

POINT

1

全員ゼロから！
でも、本気で！

仕事の引退後、高齢者男性にはハードルが高かった地域活動への参加。しかし逆に、参加者全員が同じスタートラインから協力し合えるチャンスでもありました。「パンの街」と言われる神戸で、自分たちが普段馴染みあるパンをつくる。しかも講師は有名店の現役パン職人と心強い。家ではまったく料理等の経験がなかった受講生たちも積極的に取り組み、結束力も強いチームとしてスタートすることができました。

POINT

2

食べてもらいたい
気持ちが
完成度を高めていく。

この企画の大きなポイントは、ただパンづくりを習うだけにとどまらず、身につけたスキルで地域とのつながりをつくらうとしたことにもあります。パンじいたちのつくったパンは、最終回にカフェイベント（地域の施設など）で提供・販売。「美味しく食べてもらいたい」という気持ちで、みんながアイデアを出し合い、一つひとつのパンへ強いこだわりをもって活動していました。



講師の声

FEEDBACK 01



1期パンづくり指導・
西川功晃さん
サ・マーシュ/オーナーシェフ

エネルギーで、
こどものように
ピュア。

参加者はみんな生き生きしていて、
エネルギーにも驚きました。掛け声
をかけながら動いてくれたので、やり
やすかったです。こどもと同じよ
うにピュアな所がとても素敵ですね。
「パンじい」がどんどん地域に広がっ
ていくことを願っています。

パンづくりを教え、
人生の先輩から
学ぶ。

世代を問わないコミュニティ形成に
興味を持っていたので、最初からと
ても面白い企画だと思っていました。
人生の先輩からいろいろお話を聞く
ことができ自分の社会に向ける視野
が広がりました。このような活動は
長く続けてほしいですね。

FEEDBACK 02



2期パンづくり指導・壺井豪さん
ケルン/オーナーシェフ

FEEDBACK 03



パンじい（1期メンバー）・
佐々木昌作さん

参加者の声

パンじいは、
私の人生の
一大イベント。

社会との交わりが大切だと娘から勧められ、応募しました（笑）。この年齢で新たに学ぶことが何よりも嬉しかったです。パンじいになったことは、人生の中でも一大イベントだと思います。今では毎日のように家でパンを焼いています。

楽しい！
計量も、
たくさんの失敗も。

募集チラシを見て娘が「私が男だったら参加したい！」と言うのを聞いて、応募しました。家族がみんなパン好きだったのも理由のひとつですね。はじめは計量がとにかく大変で時間もかかりました。失敗もたくさんしましたが、いまはつくれるレシピも増え、楽しさを感じています。

FEEDBACK 04



パンじい（2期メンバー）・
米田文隆さん

●パンじいのスキルアップ

地域で提供するパンもいつも同じでは、お客様も飽きてしまう。定期的に新メニューを学ぶなど、パンじいがスキルアップする場も継続的に必要です。それには講師であるパン職人からの、継続的な支援も重要になるでしょう。

●続けるための無理のない活動

パンじいたちの活動は地域からの注目を集め、取材を受けることも多くありました。モチベーションアップにつながる一方で、受講生の負担が大きくなってしまいうことも。無理なく、しかし目標を持って続けていけるペースを守らなければと感じました。

●チーム内でのバランス

受講生は60-80代と年齢の幅が広く、体力にも差がありました。受講生同士で役割の負担が偏ることを気にしてしまう場面が見られたように思います。各自ができることを理解し、互いにサポートしながらのチームビルディングが求められます。

●パンじいだからできること

パン屋さんではなかなか取り組みにくい低糖質パンなど、パンじいだからできるメニューを学ぶ。街中のパン屋さんとは異なるチャンネルでのパンづくりの可能性を探っていきたいと考えています。



ACTION PLAN

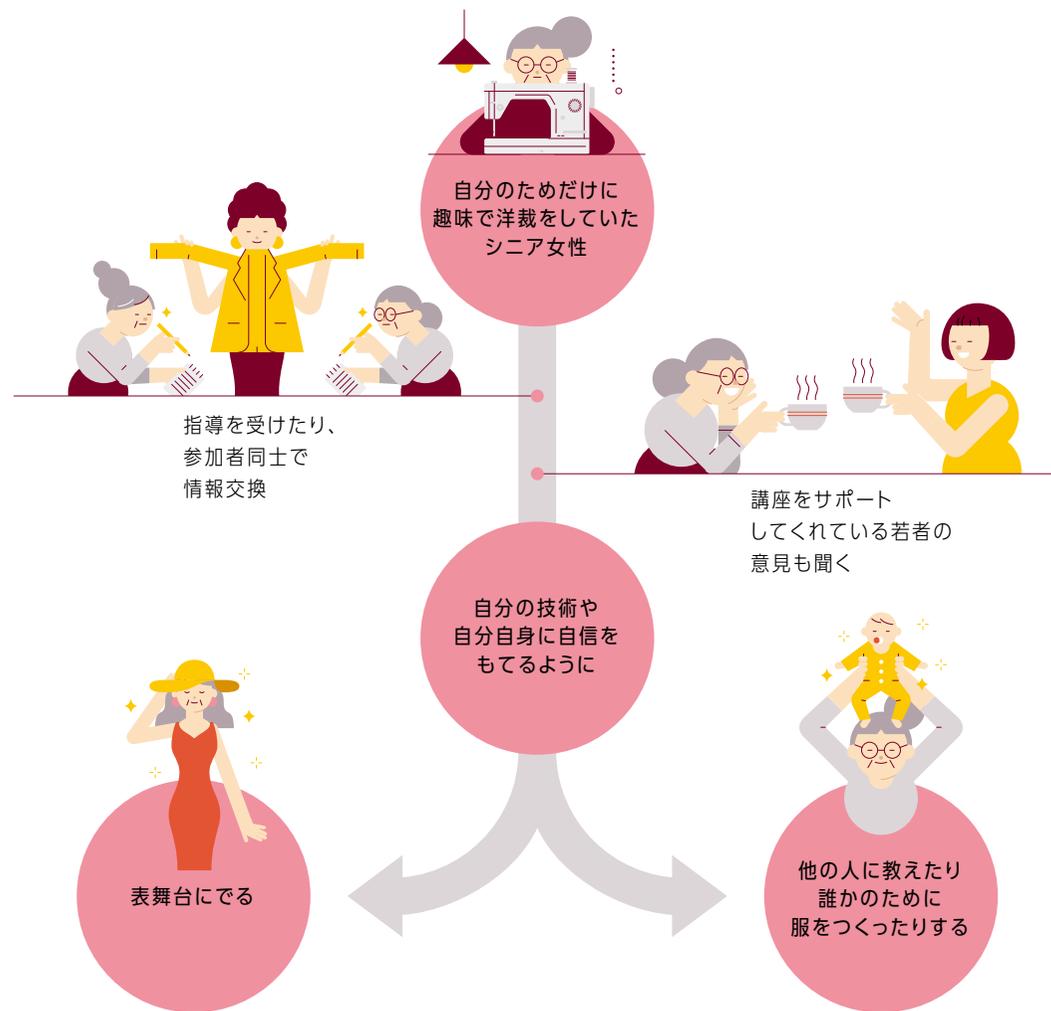
2

リメイクで生まれ変わるのは、
服だけじゃない。

大人の洋裁教室



「大人の洋裁教室」の仕組み



神戸での実施例

【大人の洋裁教室】
 日程： 2016年10月23日、10月30日、11月3日、11月13日、11月20日
 場所： デザイン・クリエイティブセンター神戸
 講師： 見寺貞子(神戸芸術工科大学芸術工学部ファッションデザイン学科 教授)、丹羽真由美(神戸芸術工科大学芸術工学部ファッションデザイン学科 助手)、韓先林(フリーデザイナー)
 参加費：無料
 参加者：6名
 主催：NPO法人プラス・アーツ、デザイン・クリエイティブセンター神戸
 共催：日本財団
 協力：神戸芸術工科大学芸術工学部ファッションデザイン学科

【大人の洋裁教室2】
 日程： 2017年7月2日、7月8日、7月15日、7月23日、8月6日
 場所： デザイン・クリエイティブセンター神戸
 講師： 見寺貞子(神戸芸術工科大学芸術工学部ファッションデザイン学科 教授)、丹羽真由美(神戸芸術工科大学芸術工学部ファッションデザイン学科 助手)、韓先林(フリーデザイナー)
 参加費：無料
 参加者：7名
 主催：NPO法人プラス・アーツ、デザイン・クリエイティブセンター神戸
 共催：日本財団
 協力：神戸芸術工科大学芸術工学部ファッションデザイン学科



実施までの流れ

いくつになっても
おしゃれで素敵に
いたいもの。

洋裁の技術を生かして洋服をつくり、おしゃれのセンスに磨きをかけ、毎日の装いを楽しむことで、生き生きとした日々を過ごしてもらうことを目指し開催した教室です。テーマにしたのは、「和服のリメイク」。着なくなった着物を洗ってほどこき、反物に戻すところからのスタートでした。基本の型紙を活かしながらオリジナルの型紙をつくります。素材を裁断、柄合わせの仕方を学びながら縫い上げていきました。大切にしていたのは、洋服を仕立てるプロセスを通し、古くなったものに新しい価値を見出すことです。今回の体験を通して、ものの価値や、消費についても考えを巡らせました。

長年培ってきた技術はあっても、家の中で制作したものを誰にも見せず、着ることもなくタンスの肥やしにしてしまっている人が多くいました。ここでは、洋裁という同じ趣味で集まった参加者同士が、制作の過程で作品について意見交換をしたり、技術を教えあうことで、さらに作品のクオリティを向上させることができました。刺激し合って完成させた洋服を身にまとして、ドレスアップして臨んだファッションショーやポートレート撮影では、参加者全員が見事なファッションモデルへと変身。制作したものを「お披露目する」というゴールを掲げることで、制作活動にもさらに力が入り、技術はもちろん、センスも飛躍的に向上させることができ、参加する前よりも自信に満ち溢れた彼女たちに出会うことが出来ました。



実施のポイント

POINT

1

あえて難易度の高い
技術・デザインに
挑戦する。

ワークショップは、着物をほどこところから始めます。反物に戻すための作業をしたり、自分の身体に合うように型紙を微調整したりと、専門的で細やかな過程を繰り返しました。難しい工程を一緒に乗り越えるたびに、受講生たちにはチームワークが芽生え、誰かがつまずいたら誰かがフォローする、という関係性ができ、全員がクオリティの高いものを完成させることができました。

POINT

2

制作のゴールとなる
晴れの日をつくる。

ワークショップの最後には、プロによるヘアメイクを施し、ドレスアップして、ファッションショー出演やポートレート撮影を行い、受講生のみなさんの装いや美容に対する意識は大きく変化しました。お披露目の場があるというだけで、制作にはより力が入り、普段は妥協してしまいそうな工程にもこだわりが出てくるなど、洋裁の技術がさらに磨かれるきっかけになったようでした。



講師の声

FEEDBACK 01



見寺貞子さん

神戸芸術工科大学芸術工学部ファッションデザイン学科 教授

おしゃれの力で高齢社会
を元気に、若々しく。
活力を生む場です。

大人の洋裁教室は、ファッションデザインを通して、高齢社会のおしゃれで元気なリーダーを育てる場です。洋裁技術を趣味から社会へ、着物を現代に、デザインからエコや伝統美を考えました。おしゃれな大人が行きかう神戸をつくりたいですね。

洋裁をきっかけに
輪は広がり、生活は
もっと豊かになる。

洋裁を通して、生活の中でのものづくり楽しんでいただきたい。教室の仲間を通じて技術をお互いに学んでいただきたい。みなさんが勉強出来る場として、いつでも集まってものづくりができるようになっていければと思います。

FEEDBACK 02



韓先林さん

フリーデザイナー

FEEDBACK 03



「大人の洋裁教室」参加者・
瀧川英美子さん

参加者の声

今まで想像もしなかった
自分に出会う、
特別な時間でした。

洋裁教室に参加してファッションショーに出たあと、友人たちから「洋裁サークルの先生をやってよ!」と誘いがありました。いまは13名の仲間たちと一緒に楽しく活動をしています。新しい自分になるきっかけをいただけたことに感謝しています。

装うことを
ずっと忘れずに
たいです。

長年自己流で洋裁を続けてきましたが、きちんとした技術を学びたいと思い参加しました。技術はもちろん、装うことの魅力そのものも再認識できた気がします。最近、洋裁学校にも通い始めました。技術もおしゃれもさらに磨きをかけていきたいです。

FEEDBACK 04



「大人の洋裁教室2」参加者・
今駒有子さん

次への課題

● 世代間の交流

ワークショップでは、若い世代の講師陣から、流行しているデザインやコーディネートを教わり、普段とは違ったイメージに挑戦できました。様々な世代が互いに学び合えるワークショップとしたいと思います。

● 新たな技術の学び

洋裁は、洋服をより美しく仕立てようとするほど、高度な技術が求められます。制作を続けていく中で、受講生の方々の向上心が高まり、もっと難易度の高い技術に調整したいという声が多く上がりました。好奇心をさらに刺激する、新たなプログラムを模索中です。

● その後の支援

自分の住む地域やコミュニティで、自らが講師となり、洋裁の技術を伝える活動をしている受講生がいる一方で運営や広報などでは苦戦している様子。活動をさらに充実させていくため、フォローアップの方法を模索しています。

● いつでも制作が行える場づくり

教室を終えてしまえば、また家にとじこもり、ひとりきりで制作しているという方もおられます。修了後も気軽に集まることができ、洋裁という共通の趣味で語り合い、技術を教えあって切磋琢磨できる、アトリエのような場所を提供したいと考えています。



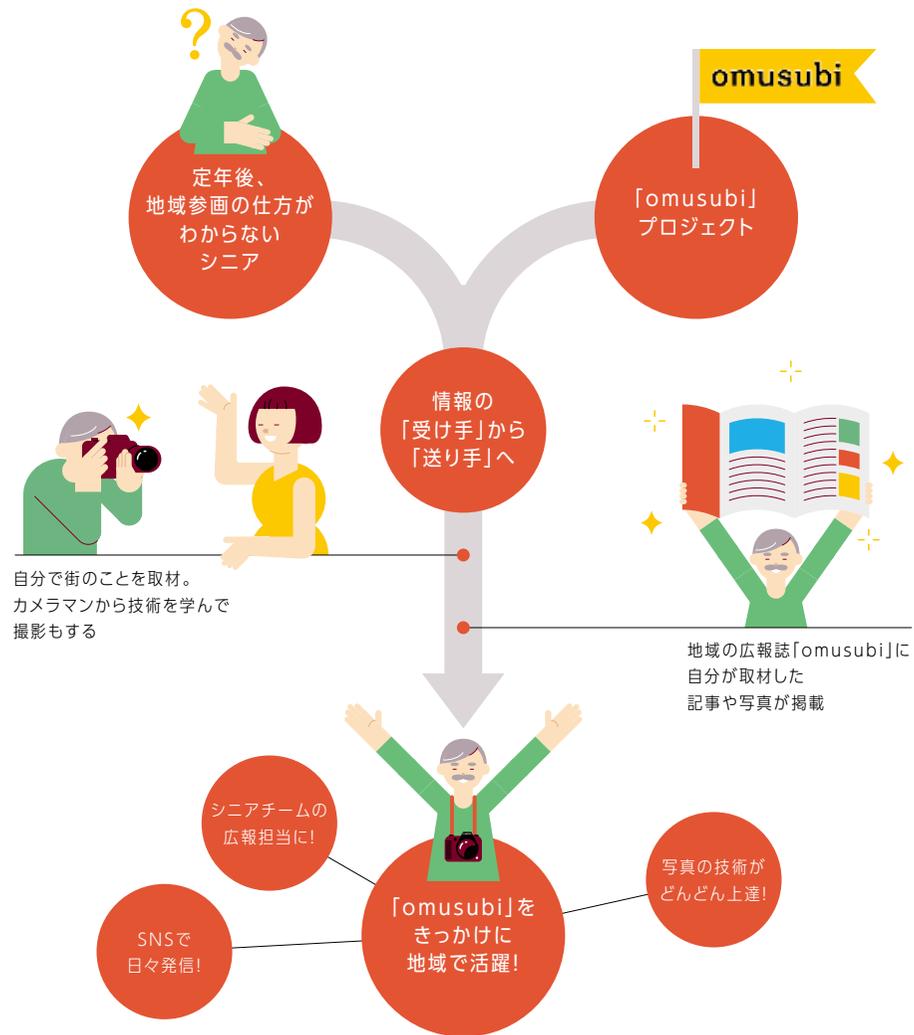
ACTION PLAN

3

omusubi

高齢者のための情報を、
高齢者が発信しなくて
どうする。

「omusubi」の仕組み



神戸での実施例

地域情報誌「omusubi」プロジェクト
 地域の手と手を結ぶ、できごとメディア「omusubi」神戸・東灘
 発行： 社会福祉法人神戸市東灘区社会福祉協議会
 企画・制作：デザイン・クリエイティブセンター神戸
 編集・取材・執筆サポート：二階堂薫（コピーライター）
 デザイン： 和田武大（デザイナー／DESIGN HERO）
 発行： 年1回／東灘区内全戸配布（約10万部）

第1号（2014年3月発行）
 「子育て中のママさん・パパさんに知ってほしいこと」
 協力：甲南大学地域連携センター（KOREC）
 写真：森本奈津美（フォトグラファー）
 第2号（2015年3月発行）
 「地域で活躍したいシニア男性に伝えたい取り組み」
 第3号（2016年3月発行）
 「個性を認めて尊重しあい、地域で、共に生きる」
 第4号（2017年3月発行）
 「防災に関する取り組みと災害時の要援護者」



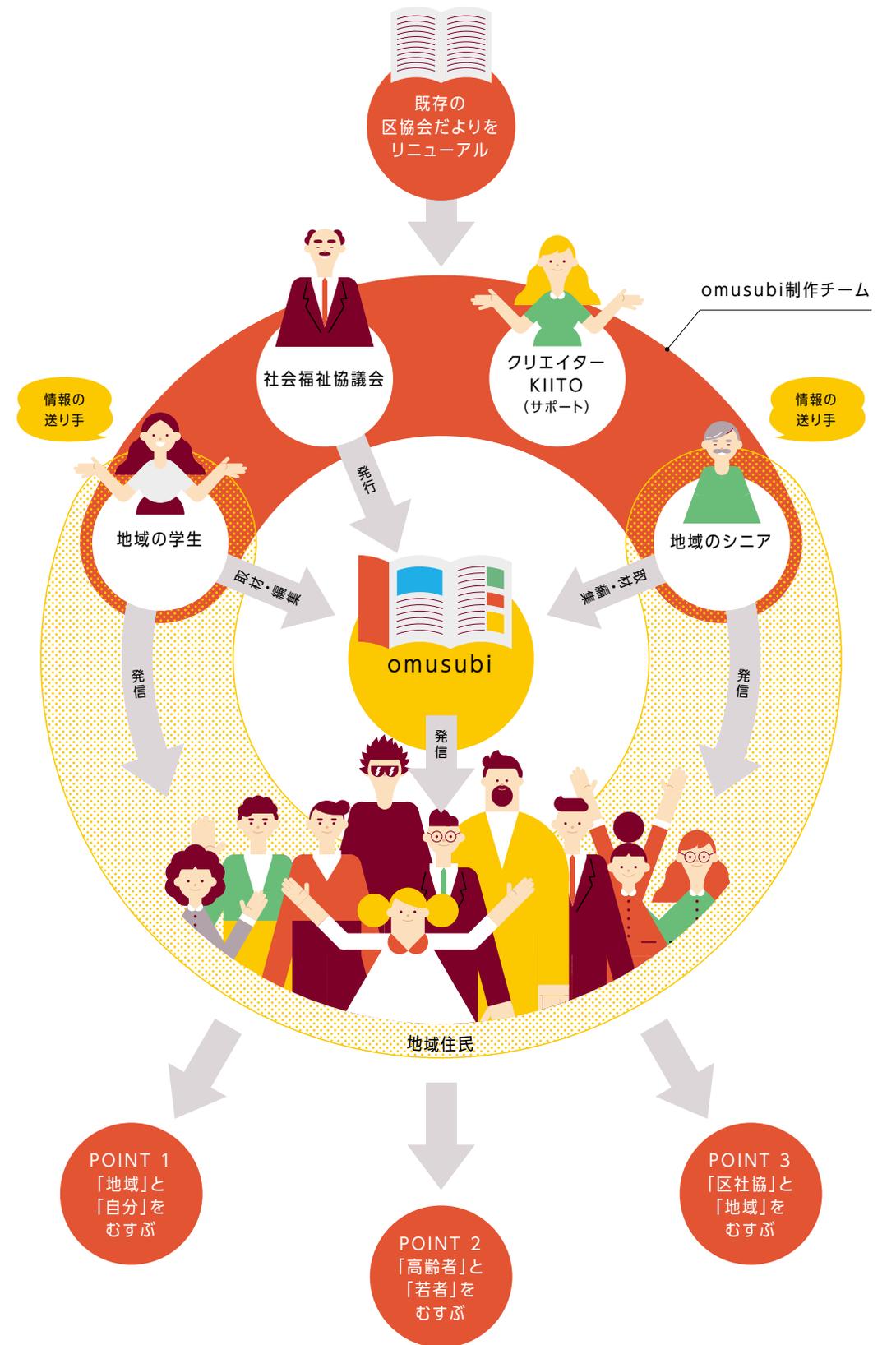
実施までの流れ

読者だった人がつくる。 究極の「読者目線」。

『omusubi』発行のきっかけは、2011年から2012年にかけて行っていた、「孤独死」をテーマとしたゼミでした。ゼミの活動の一環として発足したのが、「見守りマガジン」と題したプロジェクト。高齢者に必要な情報を伝えるため、わかりやすく手に取りやすい情報誌をつくることを目指しました。ゼミ終了後の2012年の1月と3月には、トライアル誌を神戸市東灘区で発行しています。

トライアルが神戸市内における社会福祉協議会の相談員など、福祉の現場で情報誌をつくっている方々に非常に好評であり、新たに「情報誌のデザイン」をメインテーマに据えた講座を開講。伝えることの大切さを意識し、読者視点で地域の福祉情報を発信していくことになりました。ここで本格的にomusubiがスタート。東灘区社会福祉協議会が発行していた区社協だよりをリニューアルする形で、年1回の発行が決定しました。

サポートには、ゼミのときから関わっていたプロのコピーライターやデザイナーの方を。取材や撮影、記事の執筆などは、地域の高齢者と大学生が編集のチームを組み、自分たちの手で行いました。過去4回、「高齢者の男性」「子育て」などをテーマに発行しています。現在は方針変更のため休刊となっているものの、福祉情報を身近なものにする活動を行うことができました。



実施のポイント

POINT

1

自分たちで
取材して、発信する。
だからもっと、
知りたくなる。

たとえば、高齢者や子育て、共生、防災。さまざまな福祉の取り組みをよりわかりやすく伝えていくための、東灘区社会福祉協議会による広報紙制作プロジェクトがomusubiです。これまではたんに情報を受け取るだけだった地域の方たちが、編集チームとして、自分たちで取材し、編集し、発信をする。これまで以上にまちに対して興味をもつ足がかりとなりました。

POINT

2

プロに学んで
私がつくる、
まちの情報誌。

取材や記事の執筆は、地域の高齢者たちと甲南大学や神戸国際大学などの学生で結成された編集チーム。コピーライターやデザイナー、カメラマンなど、その道のプロから編集や取材などのコツを教わり、現場でのリアルな声や体験を大切にしました。プロのサポートがあることで、情報誌としての質が向上するとともに、編集チームのメンバーもそれぞれがスキルを得ることができました。



講師の声

FEEDBACK 01



講師・二階堂薫さん
コピーライター

優しく、厳しく
先生として、黒衣として。

主体は、地域のシニアと大学生&東灘区社会福祉協議会の担当者。制作の過程を支える黒衣に徹しました。これからは取り組みが自走する方法の確立が必要です。

編集部メンバーの
イメージが、
カタチとなる手助けを。

デザインの工夫を実感してもらうこと。地域の事を自分事として考えるキッカケをつくること。

FEEDBACK 02



講師・和田武大さん
デザイナー / DESIGN HERO

多くの人の、
多くの力が心を結ぶ。

大学生のセンスと行動力。地域のシニア世代の経験と人間力。そしてプロのクリエイティブ。さまざまな力が結集したのが「omusubi」。つくる時間が、人と人、心とを結んでいます。

FEEDBACK 03



鎌田あかねさん
東灘区社会福祉協議会

参加者の声

FEEDBACK 04



北岡 裕さん

地域の情報でつながると、
暮らしが豊かになる。

仕事一辺倒だった僕が、何かしなければ、と参加した「omusubi」。知らなかった地域を知ることは楽しく、「地域でいつまでも現役でいたい」と昔は想像もしなかった気持ちに。

お互いに見守りあって
暮らす輪をつくりたい。

omusubiは様々な世代の方と出会い、地域に知っている顔が増えていくのが楽しかったです。継続していくことが大事だから、ぜひ今後も続く情報誌であってほしい。

FEEDBACK 05



都築郁子さん

多世代の交流は、地域の
居心地をよくしてくれる。

自分の暮らす地域に目を向けることで、自分たちの暮らしは自分たちの手でつくっていくのだと感じました。いろんな世代と出会える地域の行事に積極的に参加していきたいです。

FEEDBACK 06



中山諒子さん
甲南大学文学部社会学科2回生

次への課題

●いろいろな世代が、ともに取り組める仕組みとは？

さまざまな世代が関わることは、多くの視点での情報誌づくりができるメリットがある一方で、活動時間や連絡方法、記事での言葉の使い方、まちに対しての関わり方など、それぞれの目線やスタンスを合わせるのに時間を要するという課題が見えてきました。

●「伝える」に困っている人たちへ。

市内の社会福祉協議会で、同じく広報誌をつくっている方たち向けに「伝える」をテーマにしたプログラム「omusubi講座」も実施。「omusubi」は情報誌の制作のみにとどまらず、そこでのノウハウを広めていくことも、地域への貢献につながるということを見つけました。

●学んだことは、omusubi以外でも使っていける。

「omusubi」で学んだスキルは、個人が「omusubi」以外でも活かしていけるはずです。ライティング、デザイン、撮影。高齢者や学生が地域で学んだことが、また、地域の別の活動につながる場をつくることもできると考えています。

●次のomusubiのかたち。

「omusubi」は4年間発行した後、現在は休刊中。編集チームのメンバーからも継続を望む声があり、発行し続ける仕組みや福祉を地域の方たちがより身近に感じるための、次のかたちを模索しています。



ACTION PLAN

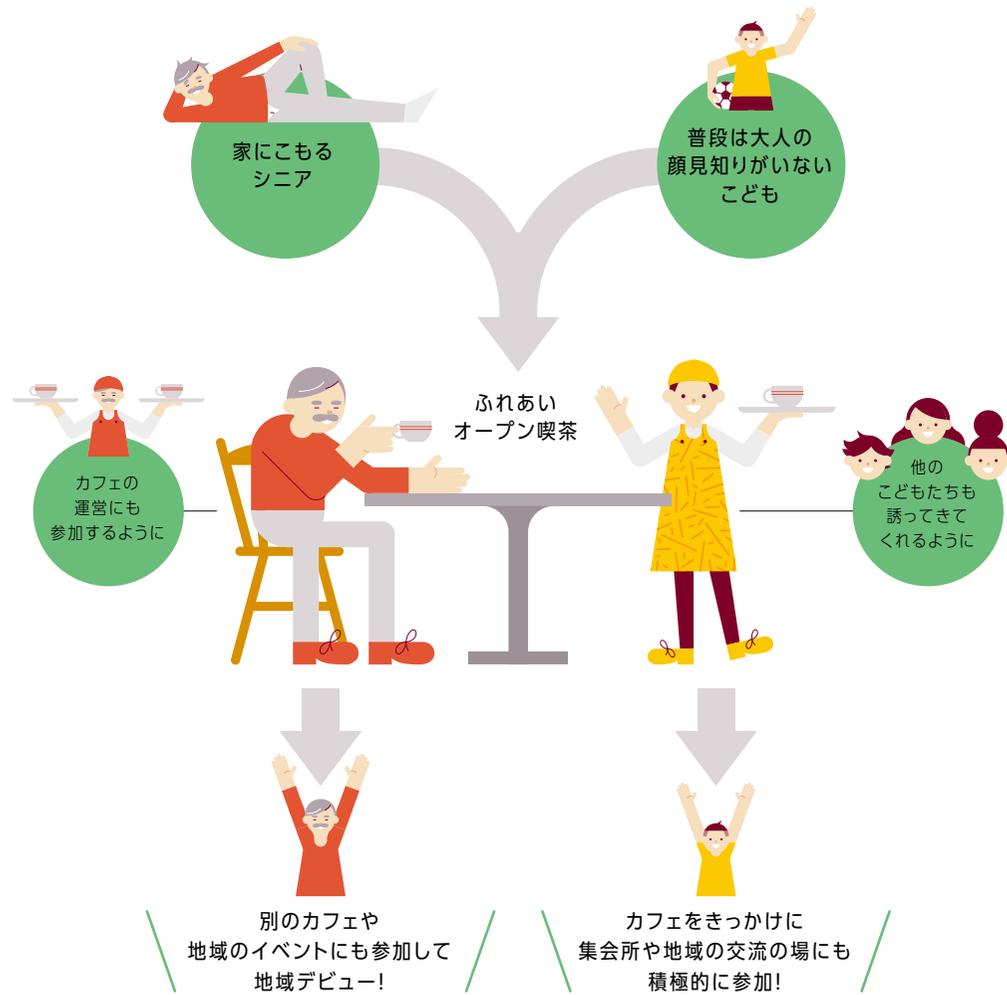
4

誰かにとっての楽しみが
誰かにとっての
学びにも変わる場所。

ふれあいオープン喫茶



「ふれあいオープン喫茶」の仕組み



神戸での実施例

「ふれあいオープン喫茶」

日程： 2012年3月25日

場所： 神戸市須磨区 竜が台住宅団地 集会所

参加費： 無料（飲食は有料）

主催： 神戸市保健福祉局

協力： ふれあい喫茶運営ボランティア「お花畑」、きたすまあんしんすこやかセンター、神戸市須磨区社会福祉協議会、サタケシュンスケ（イラストレーター）、白本恵美（テキスタイルデザイナー）

「ふれあいオープン喫茶+（研修×トライアルイベントの実施）」

日程： 2016年1月15日、2月9日、3月5日、3月29日

場所： 神戸市垂水区役所大会議場、ベルデ名谷集会所、

ベルデ名谷旧デイケアセンター

参加費： 無料（飲食は有料）

主催： ほっとかへんネットたるみ（垂水区社会福祉法人連絡協議会）、神戸市垂水区社会福祉協議会

協力： デザイン・クリエイティブセンター神戸、神戸学院大学 Shark Family、和田武大（デザイナー／DESIGN HERO）、藤原幸司（デザイナー／4S DESIGN）



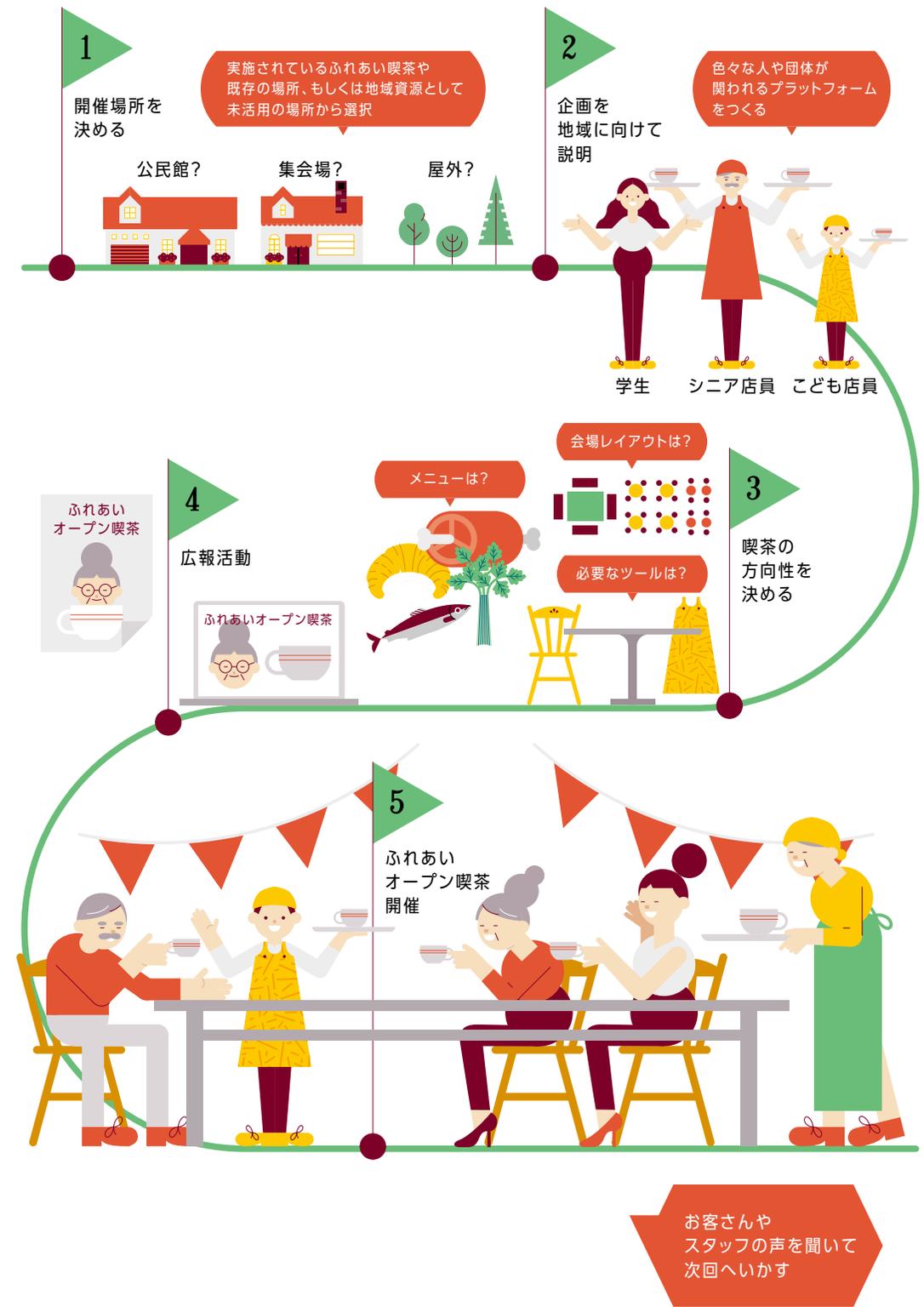
実施までの流れ

高齢者の集いの場所から まちにひらかれた場所へ。

2011年のプロジェクト以前も、地域のふれあいを目的とした「ふれあい喫茶」は、すでに存在していました。公民館や福祉センターなどを利用して、低価格の飲み物やお菓子を提供する形のもの。喫茶を利用する人は80代が中心で、運営スタッフは60代が中心でしたが、他の世代を巻き込み、さらにふれあいを広げていきたいと考えていました。

そこで2011年に喫茶のリニューアルプロジェクトを開始。みんなが関われる地域のプラットフォームの役割を担えるものにしようと思いました。たとえば、ちょっとしたこと。喫茶のテーブルクロスやエプロンのデザインを意識してみたり。地域団体の活動発表の場として利用できるよう、積極的に促してみたり。地域のこどもがスタッフになってみたり。少しずつ地域の中で、喫茶をみんなにオープンなものへと生まれ変わらせたのが、「ふれあいオープン喫茶」です。

そこから、じつに7年が経ちました。使われなくなった集会場を復活させようといわれた喫茶、大学内の子育てサロンで開催する喫茶、こどもたちが高齢者を招待する形式の喫茶、高齢者男性がオーナーになる喫茶、社会福祉法人の研修プログラムとして実施された喫茶など。喫茶は地域にひらかれた場として、様々な人が様々な企画を実施する空間となり、世代や立場を超えたふれあいを生む試みが行われつづけています。



実施のポイント

POINT

1

既存の居場所を残しながら、
オープンな場所に
つくりかえる。

高齢者の居場所であった、過去のふれあい喫茶。既存の喫茶は、コーヒーやお菓子などが提供され、高齢者の居場所としては機能していました。しかし喫茶に集うのも、運営するのも、高齢者しかいなかったのが実情。目指したのは集える場所としてのあり方を残しつつ、色々な関わり方ができる喫茶であること。そして、まちにオープンな喫茶となることでした。

POINT

2

その地域ならではの
必要な空間とは何か？

まちに対してオープンにしてみる。これは、地域の様々な団体や活動、世代の人たちが使えるプラットフォームとして、喫茶を再構築してみる、ということでした。地域のこどもたちに「こども店員」になってもらったり、イベントの発表の場にしてみたり。地域で求められる要素を「ふれあいオープン喫茶」の場に組み込み、実現させていきました。



関係者の声

FEEDBACK 01



榎一美紀さん

須磨区「ふれあいオープン喫茶」 参加団体 灘区社会福祉協議会

「福祉」って
楽しいものなんだ！

準備段階では、地域の方に想いを伝える大切さや難しさを痛感しました。それでも当日は、カラフルに彩られた会場やスタッフの笑顔を見て、「福祉」を堅いものにとらえていた自分の気持ちが、ふわっと軽くなり、楽しむことができました。

大切な
「お出かけの場」で
ありつづきたい。

2年ほど続けてきて、地域の方にとって、大切なお出かけの場所となっているのを感じます。昔着ていた洋服を引っ張り出して、念入りにお化粧をしてからいらっしゃるという方もいます。ずっとある、みなさんの場所として、継続していきたいですね。

FEEDBACK 02



樋口勲さん

ベルデ名谷「ふれあいオープン喫茶+」 参加団体
社会福祉法人みかり会、神陵台児童館館長

参加者の声

FEEDBACK 03



ベルデ名谷で開催する
「ふれあいオープン喫茶+」参加者・
仲村妙子さん

ただのゲームや
おしゃべりも、
本当に特別に
感じられる。

みんなで集まってはしゃぐのが、この場所だけだという人も多いのだと思います。最初は知らない人が多かったけど、だんだん仲のいい関係になって。そんなことも嬉しいです。特にこどもたちの顔がわかるようになってきたのがいいですね。



次への課題

● 日常 / 非日常のバランス。

あくまでベースにあるのは、ただ集える場所としての喫茶。ふれあいオープン喫茶は、定期的で開催される「お楽しみ」の場です。運営側のリソースも考慮し、バランスをとりながらの開催が重要となります。

● 特別なものにしすぎない。

特別に豪華にしたり、プログラムをたくさん準備しなければならないものだと、継続が難しい。そうではなく、そこに行けば誰かがいて、いつ帰ってもいい、そんな気ままな場所としてまちの中にあり続けることが大事です。

● まちの中で、多くの世代が関わる場をつくる。

こども店員がいることで、それまで面識もなかった高齢者の方とこどもたちが普段からあいさつをするようになったり、寺子屋のような取り組みが始まったり。自然とバラバラの世代が一緒にいて、顔見知りになる場として最適にします。

● 十人十色のふれあいオープン喫茶。

神戸市以外からも「ふれあいオープン喫茶を開催したい」という声を聞きます。「できそう」「やってみたい」と思えるのは、大切なこと。自分たちのまちでは、何が求められているか？どうやってオープンな場にするのか？考える機会を増やしていきたいと思います。



LIFE IS CREATIVE のあゆみ

高齢者が、それぞれに楽しみ、活躍できる場所をつくりたい。未来を高齢者とともにつくっていくことを掲げて、デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) は、「男・本気のパン教室」や「大人の洋裁教室」など、実践的なプログラムをつくることに尽力してきました。いくらかの活動を通し、次に感じたのは、もっと広く知ってもらうための活動も必要だということです。

そこで開催したのが、LIFE IS CREATIVE展。最初は2015年に神戸で、高齢者の方々へ向けて、取り組みの紹介を。2017年には、高齢者以外の方へもターゲットを広げ、高齢社会の現状やプログラムの詳細を知ってもらおうと東京での展示会を開催しました。高齢社会の問題は、高齢者のみなさん自身が参加する問題でもあるし、まだ高齢者でない人が自分の未来の話として考える問題でもある。より多くの人が人生について考える、きっかけをつくる取り組みとして、これからも活動をしていきます。



LIFE IS CREATIVE

リタイアのない人生のカatalog

編集 山縣杏

アートディレクション 寄藤文平(文平銀座)

デザイン 浜名信次(Beach)

写真 坂下丈太郎 P16,P17下

芦田博人 P17上,P23下右,P27下,P33上,P37中,P41

伊東俊介 P70-71上,下中右

大塚杏子 P23下左,P70-71中右

辻本しんこ P30,P31

森本奈津美 P47上,P51,P58,P59,P61,P65上,P67下,P69

片山俊樹 P55上

岩崎暁子 P65下

発行 NPO法人プラス・アーツ

〒651-0082

神戸市中央区小野浜町1-4-307

info@plus-arts.net

http://plus-arts.net

デザイン・クリエイティブセンター神戸

〒651-0082

神戸市中央区小野浜町1-4

info@kiito.jp

http://kiito.jp

助成 日本財団

2018年3月初版発行

本書の無断転写、転載、複製を禁じます。

©2018 NPO Plus Arts / Design and Creative Center Kobe